

「陳叔毅修孔子廟碑」選字



「辟雍碑」選字



「美人董氏墓誌」部分



「蘇孝慈墓誌」部分



蘇^そ
孝^{こう}
慈^じ
墓^ぼ
誌^し

603年
(隋・仁寿三年)

古典碑帖の窓⑥

木雞

木雞室

伊藤 滋

前号に紹介した欧陽詢が、壮年時代に仕えた隋時代の新旧両様の楷書を取り上げた。この時代の最も構築性に富み、完成に近づいている書として「蘇孝慈墓誌」が第一にあげられる。蘇孝慈墓誌の楷書は、やや縦長で他の隋時代の楷書と比較して格段の完成度を示している。有名な「美人董氏墓誌」(隋・開皇十七年 597)と対照して見ると、美人董氏墓誌の方が、字形構成において六朝楷書の趣を多く残している。(比較図版参照) この時代に割合多く見られる古い隸書体の様式として「陳叔毅修孔子廟碑」(隋・大業七年 611)を示した。孔子廟を修建した記念碑である。漢の八分隸書とは書風が相当異なる。様式は隸書体で流麗な波磔を具えているが、転折部分は、楷書の用筆である。しかし、三国時代の「辟雍碑」(晋・咸寧四年 278)などと比較すると相通じるところがある。左右の払いや、波磔、起筆などに共通の用筆を見ることが出来る。漢・三国時代から長い戦乱の時代を経ても、こうした古い隸書体の様式は伝えられたと考えられる。時代が落ち着くにともない、古い様式が伝統として再認識され、新旧両様の書体が碑文などにも使用されたのであろう。いつの時代においても、書法には、新旧の両様の書風を見ることが出来る。

「陳叔毅修孔子廟碑」部分



「蘇孝慈墓誌」部分・やや拡大



書道芸術院 平成の書(2009)



「繋ぐ」第62回書道芸術院展



尾崎 栄 巖

財団法人書道芸術院

参 事

文字を書いた重心の頃

昭和20年(小学一年) 故郷の白山神社境内にある忠魂碑の文字に興味を持ち文字・筆順など知らぬが仏、なぞる自分流、自信満々、楽しく書いて遊んだことが今も記憶に蘇ってくる。

中央官庁への転勤命令

昭和39年2月(東京オリンピック年・新潟地震) 岐阜県美濃の国の山間部「田空」(300年前)の足跡を思い浮かべながら田舎で賑わう神社祭礼の雰囲気しか見られなかったご時世、はじめて見る人の争いの渦に巻きこまれたような通勤者が往き交う「東京駅の朝」夜行列車の疲れも打っ飛んでしまった。田舎待はもう、打っ魂消たナァ。新潟地震の翌日、新潟地方気象台へ観測業務等の応援のため夜通しかけ官用車で一路越後へ。

筆字書きの命運始まる

(一) 運輸省気象庁「気象観測業務に多大な貢献した特別民間を含む公的機関への感謝状・表彰状の浄書揮毫担当」

(二) 運輸省航空局「成田空港の開港に伴う関東空域における航空保安施設の用地買収等整備事業・非公共用飛行場設置に係る許認可推進担当」

(三) 内閣府賞勲局「国内外における叙勲に係る浄書分野の総て」(春秋叙勲・文化勲章・死亡叙勲・高齢者叙勲・外国人叙勲・褒章) 浄書揮毫総括担当。

前 衛 の 書 壇 域

文字を書く術は、伝来が本筋であるが現在生き続けている前衛書部門は、文字という約束を超えた造形美を探索する作家の創造性に及んで四宝を用い線と空間との紙面構成によって全体像の位置付けを「芸術」としている。また、作品効果を実現させる意から自由書とも叫ばれ進行しつつある。

従って前衛精神とは無限の連鎖反応を揺さ振ることもあり、作品の顔として内なる美を誘い出すことが多い。また、作品の視点が多岐にわたるため脳裡を呼び起こすこともあるが理解する可能性を的確に極めることが肝要である。

◇ 栄 巖 語 録

○「勤勉強直」真剣にとり組んで書けば「心の財産として後世に残る」

山本聿水先生曰ク(昭和39年・秋)

○心に残る命の恩人の「声」「顔」は忘れてはならない。

亡実父曰ク(昭和53年・秋)

書のひろば

理事長 恩地 春 洋

相互理解と人材の育成

— 45回を迎えた単位認定講習会 —

総合団体である書道芸術院の必須条件として取りあげられた単位認定講習会も本年で45回を迎え、南関東総局が主管して成田ビューホテルで実施された。本講習会の特色は、

1、漢字から前衛までの五部門の目ざす処を、他部門の実技を通して理解するために、審査会員昇格の必修単位としたこと。

2、院の総局、支局が交替して、この行事を実施していること。

この行事の実施によって、院の活動目的が各地に浸透すること、逆に各地域の実情が把握できること、相互理解による院の結束に効果をあげている。逆に総局、支局側から言えば本講習の実施によって地域の結束が強くなり、更に書への意欲が高まり、人材が育っている。今後共、院の重要行事として大切にしていきたいと思います。くわしい内容についての報告にご期待を。

毎日巡回展は順調に進行中

第61回毎日書道展が各地を巡回中ですが、先日北陸展は、院の常務理事浜谷芳仙実行委員長で質実剛健な北陸の気風を感じさせる運営でした。

8月には、関西、中国、四国、北陸と終わり、9月には、東北仙台展と続きます。全国に総局支局を持つ書道芸術院は、毎日書道展でも重要な役割を担っています。

中国書の研修に

工藤永翠・前田まさ美さん

毎年、実施されている「中国への書の研修団」の派遣者が決定しました。

団長 菅野清峯 副団長 安藤豊邨
団員に工藤永翠（会員賞、前衛）

前田まさ美（毎日賞、かな）

以上2名、書道芸術院関係
日程 10月7日（水）～14日（水）

秋季菊花賞に安藤華祥さんら

— 秋季展公募入賞入選者決まる —

秋に実施されている審査会員候補を対象とする公募展の審査が8月21日（金）に文芸会館で行なわれ左記の通り決定した。（速報）

秋季菊花賞（10名）

安藤華祥 小竹正高 蜜波羅鳳雲
諸富玖扇 九条純代 阿部恵泉 及

川祥空 相内珠莉 角田悠香 大沼
樵峰

入選（44名）

漢字 朝倉希代子 今関心華 上原岳
峰 大野輝風 掛水美翠 河岡北秀
川嶋里美 久保春玉 小林明珠 佐
藤桂香 下村春香 竹浪叙舟 橘由
紀 田中喜美枝 東平絹子 西川藤
象 前浜裕香 益子翠蘭 三谷信子
かな 岡部照芳 仙田孝子 仙場美枝
子

現詩 池田沙静 梅田紅雨 小野寺幸
源 熊谷青山 佐藤奎山 橋本祥汀
水野大祐 三宅佳峰 吉田眞理 米
田智子

前衛 一條紅蕭 遠藤華香 大友紅蓉
大野礼子 角張芳蘭 金井みどり
佐藤華炎 佐藤紅茜 丹野夢草 塚
本真由美 米倉登香
刻字 本間彫仙

2010「現代の書新春展」

二〇一〇年の新春展の要項と出品者が発表された。

1 名称 2010「現代の書新春展」

出品 和光ホール 31人展

セントラル 100人展

2 会期 和光 22・1・5～1・11
セントラル 22・1・4～1・10

3 作品（本年は60歳以上）
寸法 セントラル 3×8（縦）5×5
4×6（縦）（横）

4 出品料 和光 15万円
セントラル 5万円

5 テープカット、1・5 AM 10:15
和光
祝賀会 セントラル 1・4 AM 11:30
セントラル

6 出品者全員

千支「寅」 締切9月15日
「ハガキ大」に書く、雅印のみ

7 出品者

恩地春洋 辻元大雲（以上和光）
飯高和子 石井明子 板垣洞仙
大野祥雲 香川倫子 小竹石雲
小伏小扇 小伏竹村 砂本杏花
浜谷芳仙 村野大仙（セントラル）



第45回単位認定講習会・受講生（成田ビューホテルにて）

漢 字 (六)

小 浜 大 明

題材となる漢字は数多くありますが、自分がぜひこの文字を書いてみたい、と思える漢字は多くはありません。しかし何らかの感動から、ふと浮かぶ文字があります。しかしその感情も、感動が薄らぐと同時に忘れ去られてしまいます。したがって、常にメモをしておくことが必要かと考えます。後にそのメモから草稿をつくってみると、表現効果からして作品になる文字と、なり難い文字とがあります。しかし総じて強い感動から生まれた題材は、造形として成り立ち易いと思います。

写真の「佛」は、中国の洛陽で見た石佛に感動し、その想いを書いた作品です。技量不足で思いの丈を表現できませんでしたが、その旅の良い思い出となりました。

少字数書は今後益々海外や若い世代に受け入れられるのではないかと考えていますが、類型をさけ、新しい方向性を見出すには、他部門の研究、中でも篆刻の構成美や前衛書の書線に注目し、学ぶことが必要ではないかと考えています。一字を単に大きく書くのが一字書ではなく、深遠な思想や、新しい美の表現ができるところまで極めることを目標とし、今後も努力を続けたいと考えています。



「佛」

120×90cm

第61回書道芸術院展出品

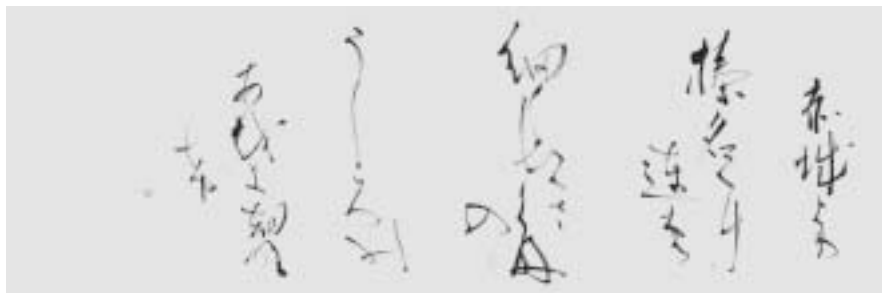
小浜大明書

21 世 紀 の 書

— 私 の 主 張 —

か な (六)

前 田 まさ美



前田まさ美書

旅の記憶が発酵して作品になる。仕込んでから(旅をして)発酵して小説になるまで10年かかる。記憶の中からふっと出てくる―ある雑誌から作家の宮本輝氏の言葉です。

書くのと同様に見る事も大切な勉強です。書展を観る機会が多い今日、沢山の感動をいただきます。

余白、墨の濃淡の美しさ。息遣いが伝わってくる作品。とても参考になります。脳裏にしまい、整理整頓をして、発酵して、作品に表したいです。

今回の作品は、故下谷東雲先生が、お詠みになった数多くの短歌の中から「赤城より榛名に連なる細長き雲の後の蒼き朝明け」です。

前橋で暮らして、24年間の思い出、故郷が鮮明に浮かんできます。懐かしさと、感謝の気持ちが東雲先生に届くように書きました。

今まで誌上で私の未熟な勉強法を書てきました。あれもこれもと、山積みな課題でいっぱいの中です。健康な心、身体があって、よい作品がつくれると確信しています。

常日頃ご指導くださり、支えていただいた先生、先輩、友達に感謝し、自分を見つめ直す機会を与えてくださったことにお礼申し上げます。有難うございました。

書と習字

小林 桃 華

(漢字部・審査会員)

終戦前、昭和19年頃のことです。

私が、始めて筆を持って、文字を書いたのは、塾ではなく、当時の国民学校二年生の、二学期から授業としてでした。だんだんと物資の、困窮する、時代になってきた頃のことです。そんな時代に、まだ週四時間の、習字の時間が、あった様に、記憶しています。

その中で、紙の無くなって、行くのが子供心にも、分ってきました。半紙を使用出来る、友達が少なくなり、新聞紙が、代用品とし、活躍し、その新聞紙も、ままならない、友達が、ふえて行き、淋しい気持ちになりました。

墨も、同様になくなり、これは代用品でなく質の悪い物で、子供の私でさえあまり良くないのが、分りました。本当に色も香りも、それに形も長方形でなく手にぎった形をしていました。

そんな道具の中で、授業が始まり、ある時の授業時間に、「どうして、これで摺るの？ 硯がだめになるじゃないの……。」という先生の声が入っ

てきました。友達は、長方形の香りの良い墨はもったいなかったのでしょう。墨ではなく、木炭の炭を摺っていたのです。そして「これ、もったいないから……。」と返事しました。友達にとって墨は大切な宝物だったのです。

先生も怒るに怒れなかったのではと思います。筆はすぐに毛は抜けてしまい、文鎮はセルロイドで、その中に砂が詰まっていたいました。

子供時代は、展覧会に出品して賞を



第58回書道芸術院出品作品
「在」 小林 桃 華 書

いただくなどと、言うことも無く、学校の授業でのお習字だけで過ぎました。その授業の中で、上手？に書けた生徒の何人かを教室の後の壁に張り出す事があり、時々その中に入れてもらえる程度でした。

就職する事なく家事を手伝いながら家に居ることだけでは満足出来ずに、何か始めたいと思い、始めたのが習字でした。その様な時に、当時家の近くに出稽古にいらしていた時にお逢いし、ご指導いただいたのが、故石田耕堂先生でした。石田先生を通して、書道芸術院を知る事が出来ました。そして、緒遂良・虞世南・王羲之、その他多くの書の達人の事を知ったのもこの頃で習字から書道になったのもこの頃だった様に思います。

石田先生は、物を観る事を山の高さ

えてくださいました。私は、どれ程の田や畑を観る事が出来るでしょう。

書の達人は、いつも遠くに仁王立ちしています。その後、石田先生は、平成7年に他界され、何にも見えていない私が残りました。「このまま終りにしようか……。」とも考えもしました。

でもまだ知りたい事もあり、自分自身もう一度書と向き合いたいと思い現在、東福青筆先生にご指導いただいています。また先生には、毎年夏にある単位講習会にも、「一緒に、勉強しましよ

う。」と、誘っていただき多くの諸先生方に優しく熱心にご指導いただく機会に恵まれとても感激致しました。

刺激されて意欲を燃します。また、講習会で諸先生方の熱いお話を聞き私も熱くなり……。と繰り返し、私なりに学ぶことが出来ましたことありがたく感謝しています。

以前は、子供達と一緒に稽古を通しての楽しい時間を持つ事が出来ましたが、私にとっては大切な宝物になりました。少子化、スピード化の現在、心の中にゆったりとした時の流れのあった昔が懐しく思い出されます。

多くの芸術院の諸先生方、はじめ東福先生や仲間感謝しながら、私にあってえられた道を細く、ゆっくり歩いて行きたいと考えています。ほんの少しの先を見つめながら。



特集 第61回 毎日書道展

毎日書道顕彰

毎日書道顕彰を受賞して



辻元 大雲

本年2月の個展は、本院恩地春洋理事長の強いお勤めをいただき、さらに詩歌の先生方のご理解、ご協力、また多くの先輩・友人の皆様を支えられて実現し身に余る成果をいただきました。亡き師、種谷扇舟先生へのご報恩の真似事が少し出来たのかなとの思いもありました。

このたび、さらに重ねて毎日書道顕彰をいただくこととなります。ますます身の縮む思いを強くしております。

ご推挙いただきました恩地理事長はじめ関係各位、ご支援いただいた院の皆様方に厚くお礼申し上げます。

今後皆様のご期待に応えられるよう精進してまいりたいと思います。

ありがとうございます。



辻元大雲書展「四季の抒情」より

会員賞



工藤 永翠
(前衛書部)

会員賞を受賞して

この度の会員賞受賞、未だ信じられない気持ちでいっぱいです。20年前から規制のない創造力を表現する前衛書の魅力に取りつかれ、今現在も勉強の

途中、会員賞など到底意識もせず、ただ無我夢中で書作していただけに、受賞の通知を受けた時は、喜びよりも驚きと戸惑いで放心状態でした。時間の経過につれ、少しずつ実感していく程、これまで多くの方々にも励まされ、支えられてきたのだということを感じ感謝せずにはいられませんでした。書道芸術院、宮城野書人会の諸先生方、玄宵社の書友、そして何よりも長年に亘りご指導してくださっている千葉蒼玄先生に、心から厚く御礼申し上げます。

この受賞を機に益々引き締め、更なる書作に挑戦し励んでいきたいと思っております。ありがとうございます。



前衛書部 工藤 永翠



会員賞〈副賞〉

第61回毎日書道展総評

辻元大雲

昨年の第60回展は様々な記念事業などを大きな成果として無事終了し、ほぼ一年間多忙を極めた毎日書道展は本年61回展として新たな一歩を踏み出した。東京都美術館と国立新美術館両館開催が一区切りとなり、62回展以降の展開を見据えながらの開催となった。

面的なご協力、關正人先生をはじめとする扶桑印社皆さんの献身的な活躍奉仕の賜物であった。

鑑別・審査に関しては通常枠に戻り、5月末の未表装による鑑別、6月末の表装後の審査体制は前年どおり行われた。都美と国立新美の陳列区分は国立新美に全国主要役員と会員賞が1ヶ月通期陳列、前期に漢字・篆刻・刻字・前衛書、後期かな・近詩・大字書の東京展と山形展が陳列された。都美会場は東京展、山形展を除く審査員以下を同じく前期後期と分けて陳列した。今回の陳列部長を辻元大雲が拝命、ベテラン部長補佐、副部長ほか委員、動員の方々に支えられ何とか重責を果たすことが出来た。6月末の準備作業から8月2日の最終日まで延べ20日以上の出動態勢はやはりきつかった。多くの皆様のご協力にこの場をお借りして深謝申し上げたい。

さらに本院の成績は、栄えの会員賞に前衛書部の工藤永翠さんが輝いたことが特筆される。昨年60回展では4名もの入賞者が本年は1名と寂しいが、何とか面目を果たせたことだけでもよしとしなければならぬ。毎日賞以下は別表のとおりで、例年並みであるが

7月12日には午前、授賞式式場のグランドプリンスホテル赤坂、クリスタルホールにて、田宮文平氏による講演「松丸東魚の人と書」が行われ、午後約200名の参加を得て盛大な授賞式と祝賀会を挙げる。冒頭毎日書道顕彰表彰が行われ、啓蒙部門の薄田東仙氏とともに芸術部門として辻元大雲が受賞、皆さんの祝福をいただいた。式後会場を虎ノ門パストラルに移し、書道芸術院祝賀会を開催。約200名の参加で大盛況。役員や入賞者紹介、挨拶などにぎやかであった。

ほかに7月13日午前、都美講堂にて、中国湖北省荊州博物館館長王明欽氏、文物保護センター副主任方北松氏による新出土簡牘、熊家楚墓などをテーマにした講演会、毎日賞解説会が前後期の2回開催され、さらに国立新美では会員賞受賞作家の席上揮毫会が行われ、前期前衛書部代表として本院工藤永翠さんが担当、素晴らしいデモンストレーションを披露した。

今後、関西展を皮切りに地方展へと会場を移して展開されるが、各展での本院関係者の活躍が期待される。ご協力のほどよろしく願いたい。

第61回毎日書道展公募出品点数（会友含む）および入賞数

項 部 別	毎日展総出品点数				芸術院出品点数				芸術院入選点数				毎日賞		秀作賞		佳作賞		U23毎日		U23新鋭		U23奨励	
	総数	U23	一般	会友	総数	U23	一般	会友	総数	U23	一般	会友	総数	芸術院	総数	芸術院	総数	芸術院	総数	芸術院	総数	芸術院	総数	芸術院
漢 字 部	13,022	727	9,892	2,403	370	14	293	63	210	7	140	63	92	2	211	6	422	11	5		7		29	1
か な 部	5,660	165	4,443	1,052	269	1	224	44	174	1	129	44	40	2	92	5	185	9	1		2		7	
近代詩文書部	7,347	625	5,291	1,431	530	41	352	137	303	16	150	137	54	4	123	9	247	17	5		7	1	26	1
大字書部	2,779	239	1,978	562	223	14	134	75	157	13	69	75	20	2	46	5	91	9	2		3	1	11	
篆 刻 部	620	31	492	97	1	0	1	0	0			0	4	0	11	0	21	0	0		0		2	
刻 字 部	897	31	755	111	120	2	90	28	79	2	49	28	7	1	16	2	32	4	0		0		1	
前衛書部	1,687	74	1,316	297	532	41	388	103	342	21	218	103	13	4	29	9	58	19	1	1	1		3	2
合 計	32,012	1,892	24,167	5,953	2,045	113	1,482	450	1,265	60	755	450	230	15	528	36	1,056	69	14	1	20	2	79	4

毎 日 賞

漢字部Ⅱ類
大越墨扇



かな部Ⅰ類 前田まさ美

大字書部
川村美泉



前衛書部
嵯峨翔葉

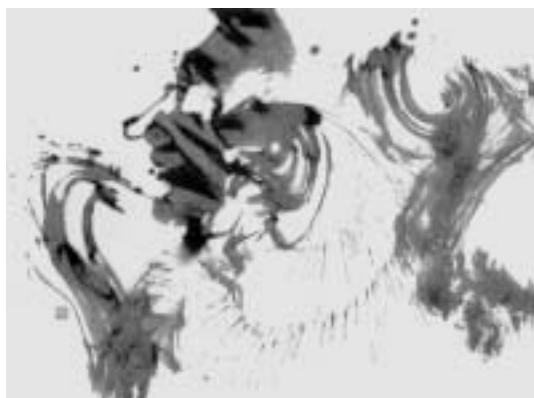


近代詩文書部 伊藤翠心

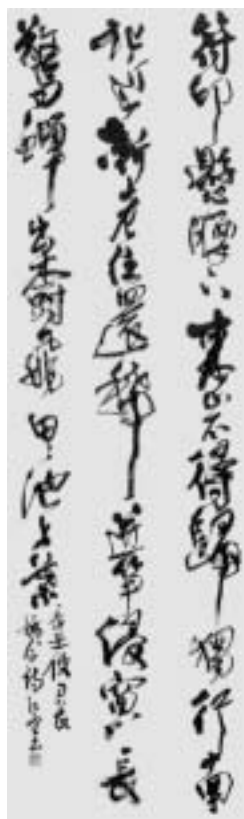
毎日賞



大字書部 東原春城



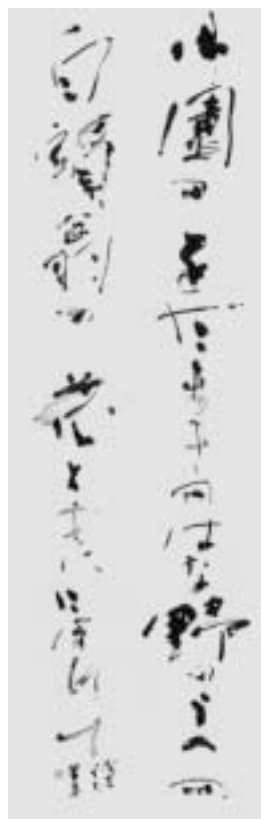
前衛書部 佐々木青霞



漢字部I類 藤野江雪

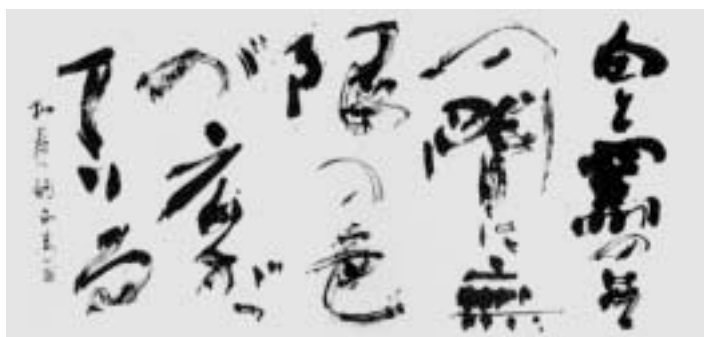


刻字部 阿部太石



近代詩文書部 中島翠阜

毎 日 賞



近代詩文書部 小 竹 正 高



前衛書部 西 岡 悦 子



かな部Ⅱ類
塩 澤 美 紅

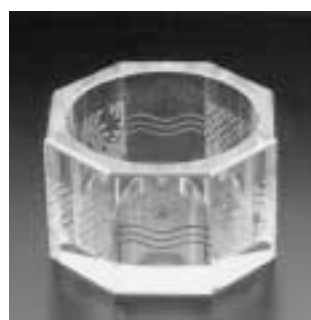
副 賞



佳作賞（副賞）文鎮



秀作賞（副賞）筆置



毎日賞（副賞）筆洗



U23奨励賞（副賞）



U23新鋭賞（副賞）



U23毎日賞（副賞）

秀作賞受賞者

佳作賞受賞者

・漢字部 (I類)

生田翠龍 上柳佳規 木村香翠

・漢字部 (II類)

板橋雅邦 中井祥映

・かな部 (I類)

川口美智江 九條純代 仙場美枝子
藤村昌子

・近代詩文書部

阿部翠麗 金濱珀燐 川崎鯉舟
北嶋青湖 國嶋春枝 酒井優子
田中扇溪 長島優雨

・大字書部

有野瑋扇 佳波琴窓 小浜桂雪

・刻字部

佐藤哲舟 遊佐聖心

・前衛書部

青木かよ 一條紅蕭 小野寺三枝
片山敬子 酒井花雪 佐藤華炎
野口加奈 茂木真蘭

・漢字部 (I類)

井上輝月 岩田誠華 笠見梅香
田中恵泉 藤井龍仙 松下紅月
山崎皐月

・漢字部 (II類)

安藤麗華 王子谷煌水 田中翠恵
西川藤象

・かな部 (I類)

天野あい子 岡部照芳 酒井恵子
下屋春美

・かな部 (II類)

佐藤希雲 清水喜代子 庄司紅邨
松井知子 渡部千佳子

・近代詩文書部

阿部恵泉 井口静峰 小野寺隼源
小原華杏 河瀬明雪 佐々木一峰
佐藤光耀 椎木山風 嶋田麗雲
菅原亜希子 田中梢翠 中尾祐次郎
中村舜水 花淵桂舟 水野大祐
若田文邑

・大字書部

掛水美翠 黒田絃世 玉腰雅雪
寺内宏山 浜野永室 船津裕扇
山岡扶佐 和田雪燕

・刻字部

赤羽蘭徑 篠田華所 高橋芳琴
畑中玄石

・前衛書部

伊藤有津 及川ミツ 金井みどり
工藤山房 佐々木蓮峰 菅原希和
高村光霞 塚本真由美 鶴飼純子
富澤理恵子 永井朋美 伏津玲子
藤原紅雲 真木春美 丸橋華葉
三木彩月

U 23 新鋭賞

・漢字部 (I類)

高岡希水

・近代詩文書部

安達瑠里子

・前衛書部

後藤 恭

U 23 奨励賞

・近代詩文書部

木村侑香

・大字書部

三谷真一郎

・前衛書部

高原紗秀 滑川留美



受賞者の皆さん



会員賞受賞・工藤永翠さん
恩地春洋・西林兼宣・板垣洞仙先生より祝いメッセージ!!
(会員賞・選考委員)

〈解説〉書譜には、いわゆる「節筆」がある。紙の折れ目に筆が当たって現われる偶然の所産である。また、筆の動きを一旦止めるようにして、改めて次画の方向へ打ち直す断筆という筆法が多く見られる。

独草体を基盤とし、頭部を重くするか広やかにとる点や、一字の右下隅に比重をかけて安定させようとする点は、まさに王法の骨格と筆法を準繩としている。
（編集部）

用紙 半紙普通判

※注

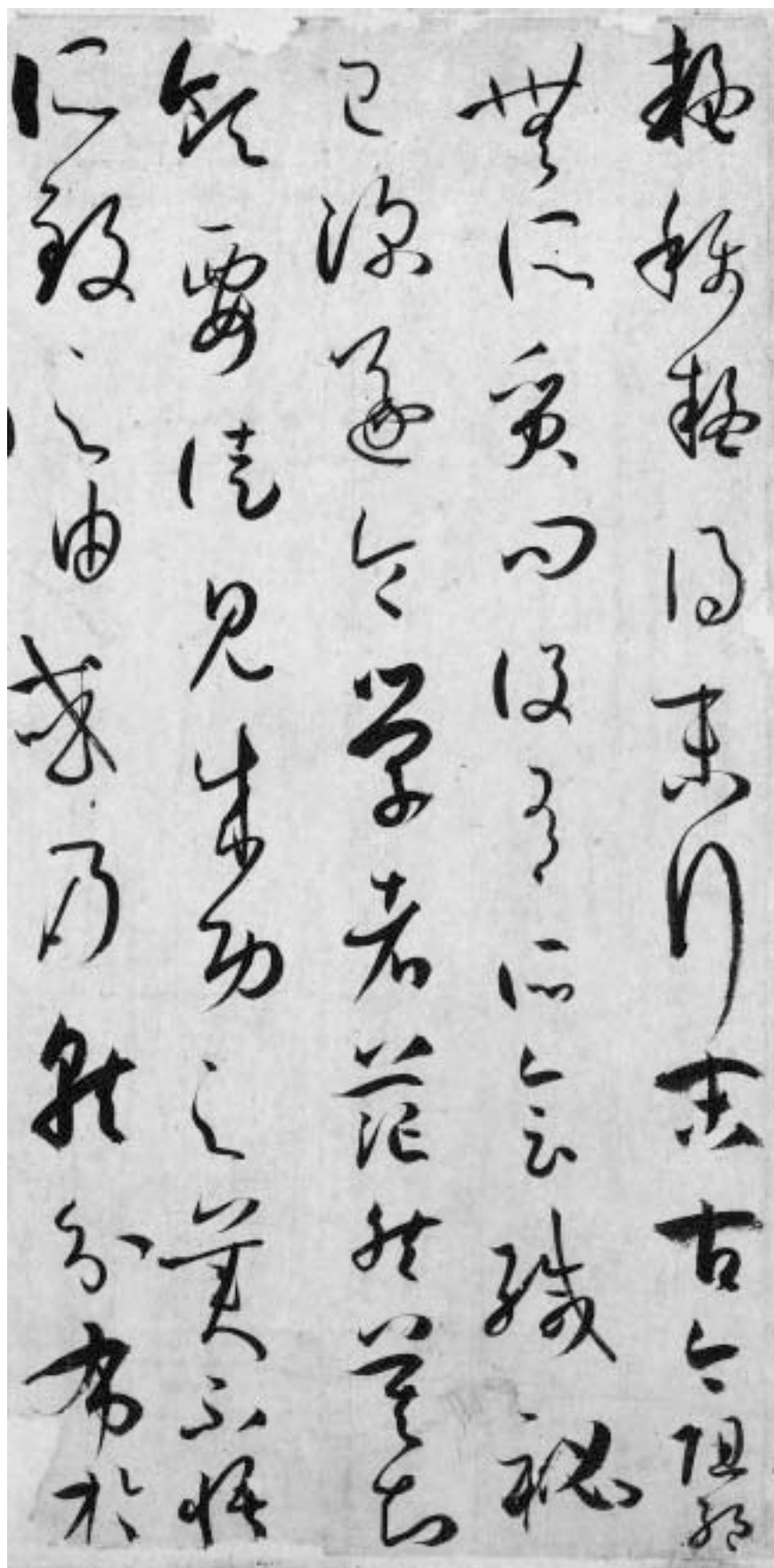
漢字研究部競書作品は、左の法帖の中から何文字臨書してもよい。
（掲載部分以外は不可）

※落款を必ず入れる

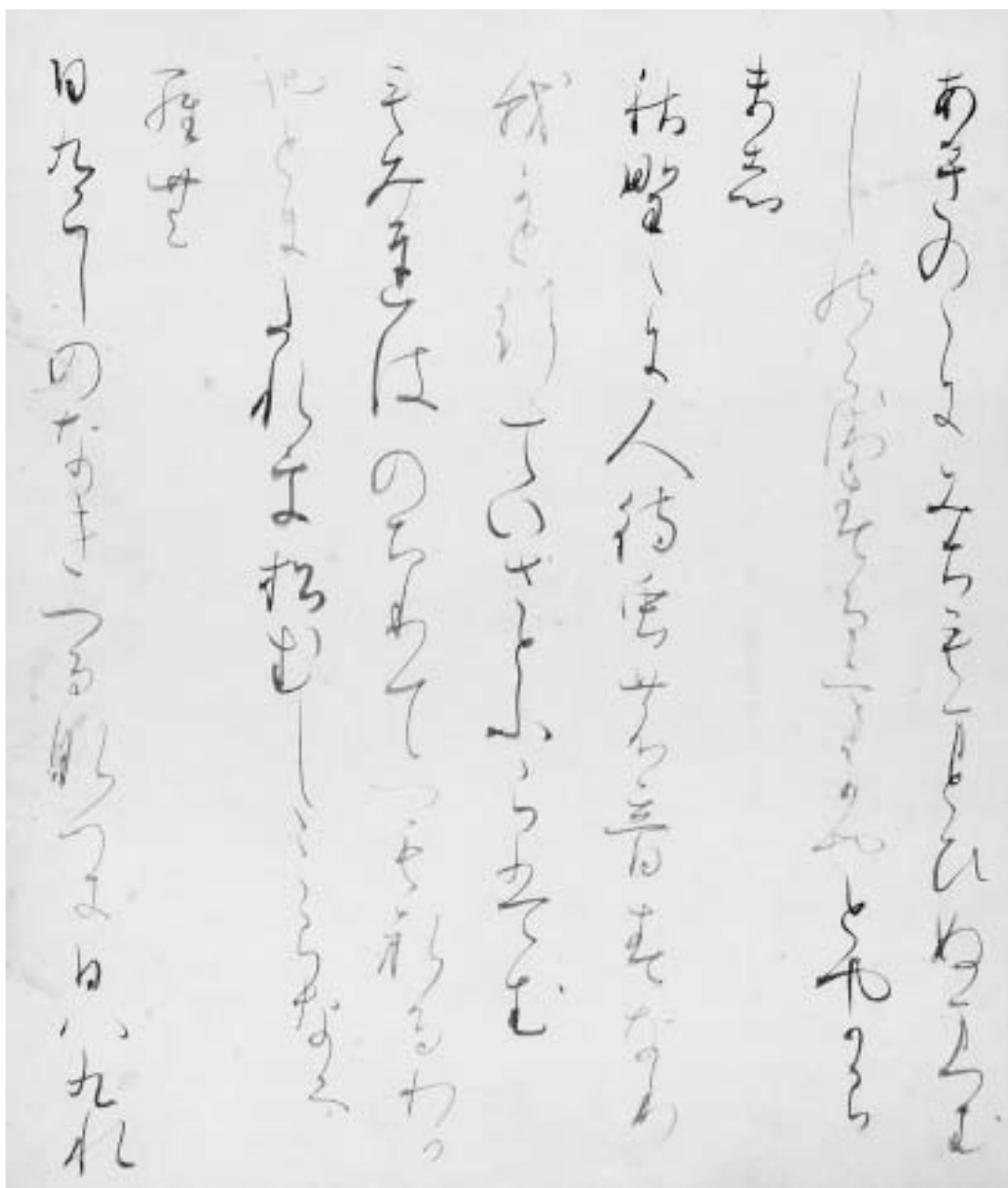
署名、もしくは

〇〇臨

（押印のみも可）



疑稱疑。得末行末。古今阻絶。／無所質問。設有所會。緘秘／已深。遂令學者茫然莫知／領要。徒見成功之美。不悟／所致之由。或乃就分布於



※左記の掲載歌一首以上を書く
(全臨も可)
用紙・半紙普通判(料紙可)

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨(押印のみも可)

〈よみ〉

あきのゝにみちもまどひぬまつむ
しのごゑする方にやどやから

まし

秋のゝに人待虫の音すなり

我がと行ていざとぶらはむ

もみぢばのちりてつもれるわが

やどにたれを松むしこゝらなく

ひぐらしのなきつるなべに日はく

れ

〈解説〉

関戸本古今集の装丁は、糸で綴じた冊子本であり、今日では綴葉装あるいは列帖装と呼んでいる。つまり料紙を数枚重ねてそれを二つ折りにしたものをいくつか重ねて綴じ合わせたものでもとは「古今和歌集」全二十巻を上下二帖に調じたものである。料紙は鳥の子で、白紙のほかは紫・茶・緑など数種の染紙が所用される。料紙の制作と冊子本の装丁に一方ならぬ工夫を凝らした当時の人々の心くばりが彷彿として浮かぶ。これらの表現上の理知的な多彩さが貴重とされる所以である。

※右記の掲載歌一首以上を書く(全臨も可)

用紙・半紙普通判(料紙可)

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨(押印のみも可)

漢字規定 初段以上 【十月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

大野祥雲選書



無為小人儒 よみ（小人の儒と為る無かれ）

書体＝自由

習い方解説 (六)

大野祥雲

無為小人儒
（小人の儒と為る無かれ）

〔無〕横画の方向や長さを考え、力強いタッチで運筆。斜画から突き当ってできた横画で締める。

〔為〕無からの勢いを受け、二画目は直線的に鋭く紙を切る。鋒先を立てて転じ、大きな円を描き、再度、筆を吊って終筆となる。

〔小〕気脈を通わせ一気に書く。単純な構成になったが、左右の点の響きあいがある。

〔人〕簡単な文字だが、筆の開閉を生かし、温かく座りのよい文字に。

〔儒〕人偏を澄んだ線で力強く。これを受けて、旁は曲直の線で息永く運筆。各所にできる白を生かすように。

漢字規定 秀級以下 【十月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

種谷萬城選書

習い方解説 (六)

種谷萬城

守眞志満

(眞を守れば志満つ)

「守眞志満、逐物意移（自然の道を守れば、志は満たされ、物を追い求めれば、心もそれにつれて変わってゆく）」は千字文の中の一句です。

今月は、唐の四大家の一人・顔眞卿の書風で倣書しました。顔眞卿の楷書は、肉太の線で重厚な魅力があります。「蚕頭燕尾」（起筆が蚕の頭のように円く、右払いの収筆が燕の尾の形のようなものである）の特徴を持つ筆法は、筆の弾力を利かせ、特有の表情を醸し出しています。また、字形は向かい合う縦画が外側に膨らみあう「向勢」の構えをしています。

先ず、顔氏家廟碑、顔勤禮碑、建中告身帖などの顔眞卿の楷書を臨書し、その書風の特徴を捉え、それから倣書をして下さい。



守眞志満 よみ（眞を守れば志満つ）

書体＝楷書

かな規定 初段以上 【十月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判（料紙可）

下谷 洋子 選書

習い方解説 (六)

下谷 洋子

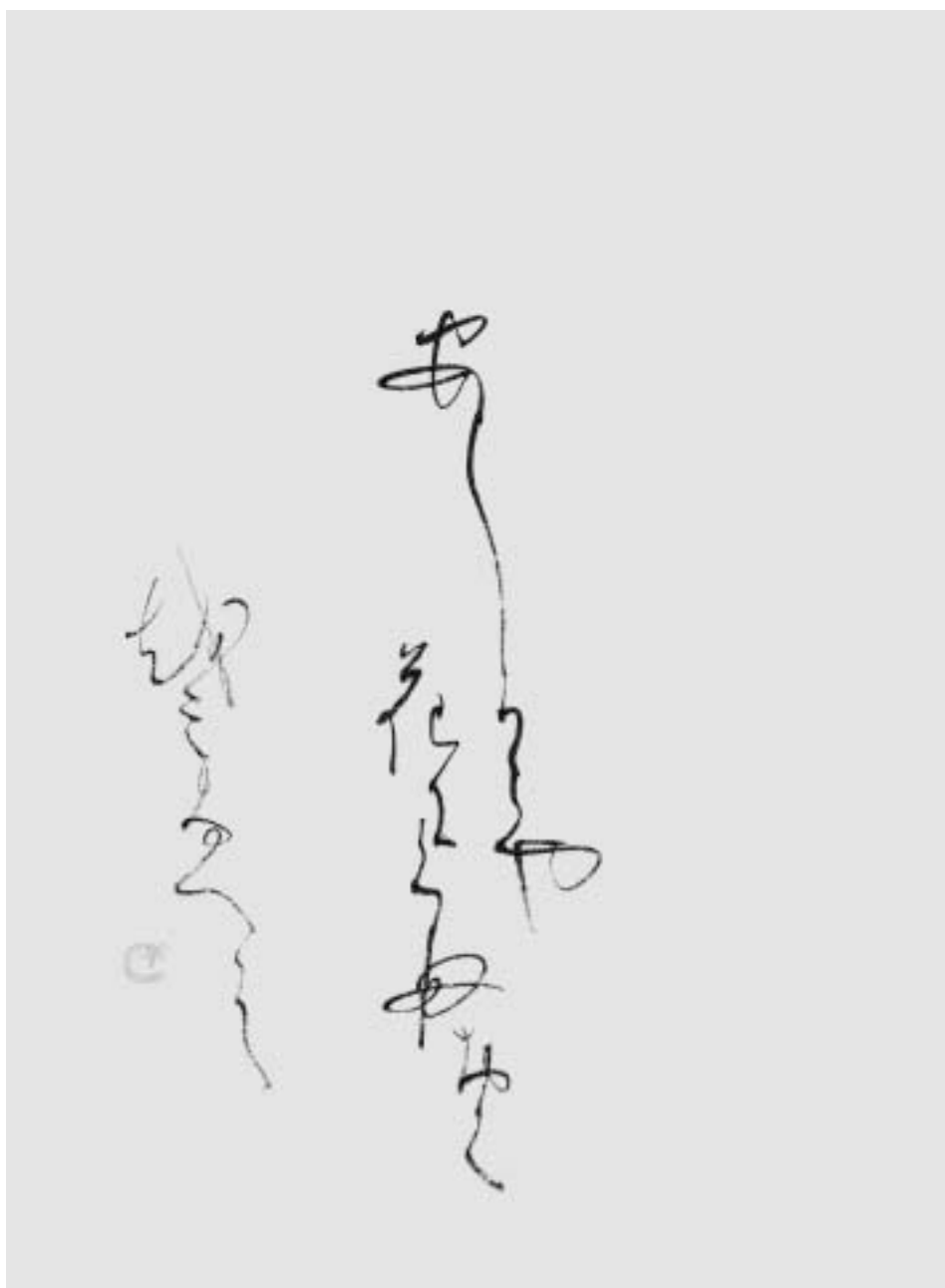
足柄^{あしがら}や花に雲^{きみ}おく女^{をみな}郎^へ花

（正岡子規）

足柄という高地での景色で、すっきりと気持ちのよい句です。

最後ですので、やや思い切った散らしです。連綿を多用し、勢いよく連綿することで行が揺れるので、この揺れを活かして左上に動くように配しました。かなり右下方に流れての指向のため、敢えて右側を空けました。連綿は、呼吸に乗って書くことが大切です。息を詰めないで、タテは素早く、ヨコはゆったりと、緩急のリズムが出ると生きいきとした魅力になります。

参考



よみ方

あ(安)しが(可)らや花に(爾)く(久)も(母)おく(久)
を(越)み(三)な(奈)へし(之)

創作

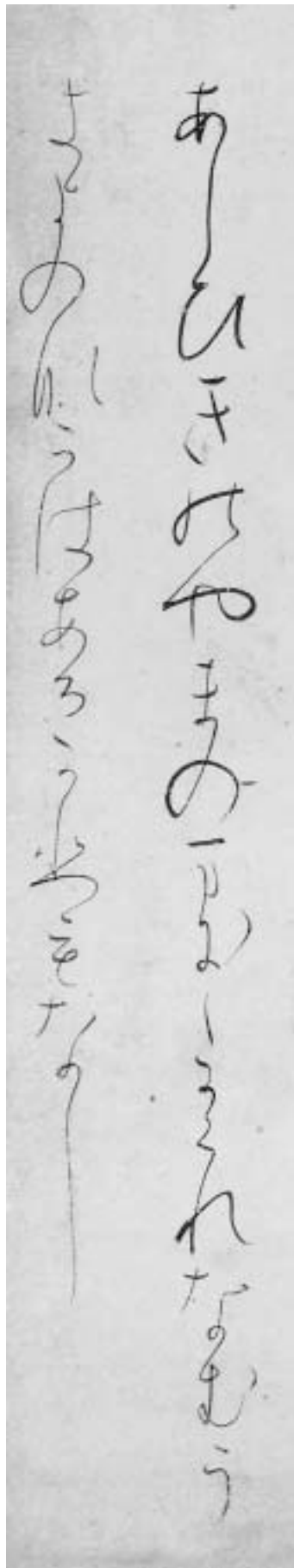


足柄やは(八)な(那)に(爾)雲おく
(久)女郎花

かな規定 秀級以下 【十月十五日締めきり】 用紙 半紙タテ1 $\frac{1}{2}$ (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真のうたを全臨、または部分(二字以上の連綿)を臨書する。

高野切第三種
(掲載写真縮小93%)



よみ方 あしひきの(能)やまのま(万)に(尔)く(可)く(久)れなむう

き(支)よのな(那)か(可)はあるか(可)ひ(悲)も(毛)なし

習い方解説 (三)

かな条幅規定 【十月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切 (料紙可)

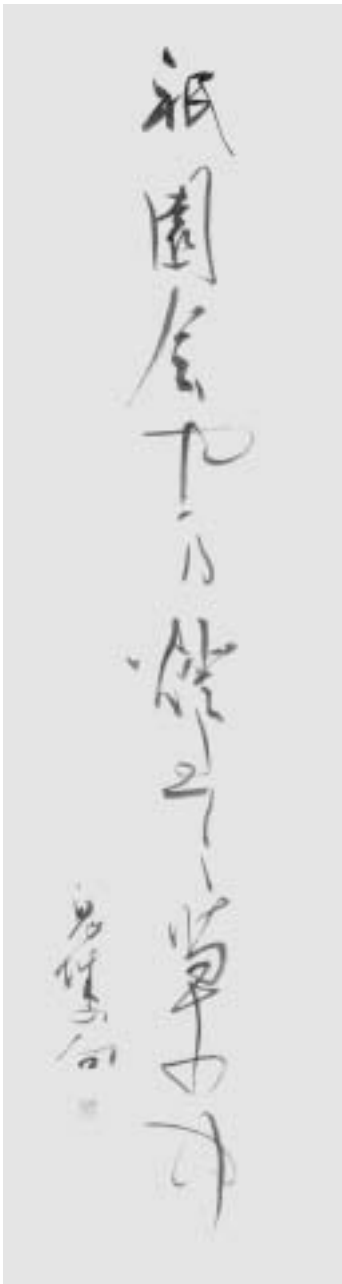
田村澄子 選書

田村 澄子

祇園会や万燈たてて草の中

(村上鬼城)

(祇園会) 宵宮であらう、終夜祇園囃がひびき提灯をかけつらねて賑わっている様子が見えるよう。半切に俳句一行書きの形態にしました。変体仮名は一ヶ所だけです。上か下に二行に見える形態にしてもいいですね。余白を美しく一行書きの場合は作者名をゆったり入れるのもいいですね。



よみ方 祇園会や万燈た(多)てて草の中

創作

※たて形式に限る

漢字条幅規定 初段以上 【十月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

村野大仙 選書

習い方解説 (六)

村野大仙

周りの白（余白）が少しでも明るく美しく見える様にと心掛けました。すっきり冴えたさわやかな味も線質により大きく左右されます。線質については言葉が一人歩きし筆による表現を一致させるのは中々難しいようです。論文（頭）で覚えるより古典を座右に置いて筆を持ち、体験（身体で）して会得したいものです。早かれ遅かれその頻度が物を言います。

一振高名満帝都 歸來還弄峨眉月

（一）たび高名を振って帝都に満たば 歸り来って還弄せよ峨眉の月を）

書体＝自由

漢字条幅規定 秀級以下 【十月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

半田藤扇 選書

習い方解説 (六)

半田藤扇

「風吹く林には落葉が粉々として秋声をならし、露草に鳴く虫は、夜の涼しさを送る」

最後の締めくくりとして草書もいくつか取り入れ書作、画数の多い文字が多かったため、少々難しい課題であったかも知れませんが、抑揚をつけ、響きの高い線で表現できるようトライしてみませんか。線質は一生のテーマです。



風林落葉秋聲動 露草鳴蛩夜氣涼

（風林の落葉秋声動き 露草の鳴蛩夜氣涼し）

書体＝自由

習い方解説 (六)

「徒然草」

著者吉田兼好は京都吉田神社の神官の家に生まれ、後宇多天皇の寵愛を受けたが、後に出家して諸国を旅した。神、儒、仏、さらに俗をさけ静を好む老荘の思想に強く影響された。枕草子とともにわが国随筆文学の双璧ともいわれる。

練習にあたって

自我を出さない、すなわち自己流にならないこと。月例の審査に際してこれが一番の注目点なり。暢達、懐の広さ、輝きといったことが選ばれる観点である。

今回をもって私の担当を終わりますが、いかがです上達しましたか。もう一度記すと、単にこの頁の手本をみて練習するだけでなく、他の古典や古筆等についてペンを走らせることが書の領域を広げることになります。6ヵ月間のお付き合いご苦労さまでした。

※落款を入れ忘れないようにしてください。(落款は自分の名前を入れてください。)

つれづれなるまゝに日くらし
硯にむかひて心にうつりゆく
よしなしごとをそはかとなく
書きつればあやしうこそもの
ぐるほしけれ (徒然草より)。

用紙はがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体は自由

〈よみ〉

つれづれなるまゝに日くらし
硯にむかひて心にうつりゆく
よしなしごとをそはかとなく
書きつればあやしうこそもの
ぐるほしけれ (徒然草より)

木一作品
各部総評

NO. 579

漢字部 師範 内田 皓泉

篆書の研究を積み重ねた成果が現れている。柔毫長鋒による線質の変化が動きを与えて妙。

◎漢字部総評 書字の基礎は古典からいかに多くを吸収し、自らの滋養となるよう生かすことである。食わず嫌いにならないよう。(大雲評)



かな条幅部 二段 小暮 昭二

やや小ぶりですが、手本を正しく理解して丁寧に書き大変好ましい。誠実さが伝わりこの姿勢大切。◎かな条幅部総評 直線だけでも曲線だけでも趣きは味気ないものです。曲直の変化がリズムに乗って表れるよう願います。(洋子評)

前衛書部 特選 相内 珠莉

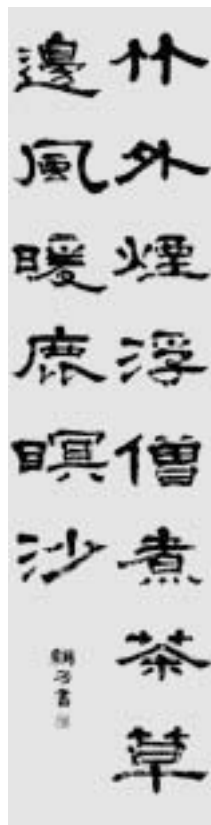
濃墨を巧みに使い、軽快で伸びやかさを持ち、それで鋭い線質である。構成もよく余白も美しい。

◎前衛書部総評 余白を生かした作が多かった。紙面全体を使用する大胆な作も欲しい。(洞仙評)



漢字条幅部 師範 東平 絹子

がっしりと紙をつかんで強い線質の隷書、地味な平素の技法練磨が、現代書の可能性をはらむ。



現代詩文書部 特選 原 博峰

詩の内容と書風との融合を試みた情趣溢れる作。シャボン玉の漂い揺れるイメージが素直に迫る。

◎現代詩文書部総評 書き終えたら必ず読んで文章チェックを必ず落款を入れて下さい。(舟雲評)

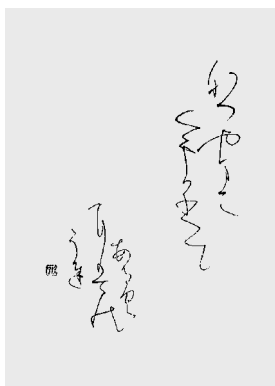


◎漢字条幅部総評 自分の呼吸、自分の書くリズムをつかんで初めて創作となる。技術の裏付けがあって始めて達成される。(春洋評)

かな部 師範 岡部 照芳

大胆と繊細の融合が完璧です。古筆の香りを漂わせながら、冷静に今をとらえた見事な作品です。

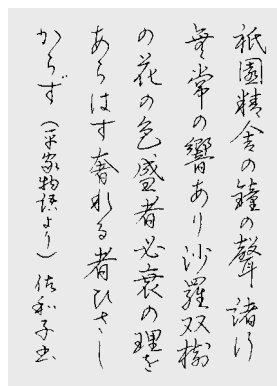
◎かな部総評 手本を忠実に学んでの完成品が目立ったが、創作へ踏み出す努力を望みます。卒と類の誤字多出、字典を。(明子評)



ペン字部 師範 沖 佐和子

暢達した筆意と明るく懐の広い字形ながら骨力を蔵している。一糸乱れぬ運筆に確かな腕を感じた。

◎ペン字部総評 独自性の強い参考手本に翻弄された方多し。字形をただ真似るのではなく、自分なりに解釈し発展させる。(澄神評)



特別研究部 優秀作品（特選）

現代詩文書
（大雲）

阿部 恵泉



70×150cm

「煙のパレット」

◆夏の陽を浴びて身体中の力をふりしぼり表現して行く姿が目に見えよう。そこから力が生み出されているのだろうか。印が本文に比して固い。

（倫子評）

◆青淡墨で力強く表現した作は真夏の陽光に映える向日葵の姿を思い浮かべさせて妙。最終行の押えがやや強すぎたか。全体構成への配慮を。（大雲評）
◆最後の向日葵と落款の表情がやや単調で残念だが、強くもゆったりとした書き出しから三行、特にしなやかな片かな表現に魅せられました。

（洋子評）

◆淡墨作品だが、線も強く構成にも大胆さがあって迫力を感じます。さらに煙のような線でまとめると一層よくなると思う。雅印は一考を。

（祥雲評）

前衛書

（白珠） 相内 珠莉

「彩」

◆潤濁の変化を大胆に取り入れ、ダイナミックな作となった。やや広がりすぎた濁筆部に違和感あり。筆端の切れと冴えある線表現を。

（大雲評）

◆下部の複雑さに対して、中央の間に少々気になるが、思い切りのよい大らかなさに見えます。にじみが奥行きを醸し華を演出しました。

（洋子評）

◆美しい墨色です。構成にも明るさがあってよい。ただ、中心の扁平な線についてはさらに深めてほしい。雅印も作品にふさわしいと思う。

（祥雲評）

◆動きを二分にした印象に初めは抵抗を感じたがしばらく眺めている内にだんだんとなじんで来た。どうしてだろうか、筆の動きによるものか。

（倫子評）

総評

ピアノの超絶技巧で知られるフランツ・リストはヴァイオリンの鬼才といわれたパガニーニのラ・カンパネラに感動し生涯において三度も作曲を試みている。私たちの作品も何か（書く文字・意味）に感動し制作するわけであるが一度発表してしまうと再度同じものを発表することとはまづない。芸術作品というところ、となく即興的なイメージが強いが同じものを推敲を重ねることも大切なことである。

今回は86点（漢14、か11、現33、前27、篆1）この特別研究科で推敲を重ねる機会に臨んでもらいたいものである。

（蒼玄）

〈特選候補者〉

漢	華祥	安藤	華祥	現	陽陽	岩崎
〃	百合	相澤	玉翠	〃	大雲	長島
〃	大雲	大隅	晃弘	〃	白珠	工藤
か	卯月	栗原	信子	前	四谷	鈴木
〃	書泉	田子	白嶺	〃	咲舟	佐藤
〃	炎佳	佐藤	華炎	〃	蓮紅	浅野
〃	東実	吉田	眞理	篆	墨宣	中山
〃	蒼原	熊谷	青山	〃	無硯	彩紅



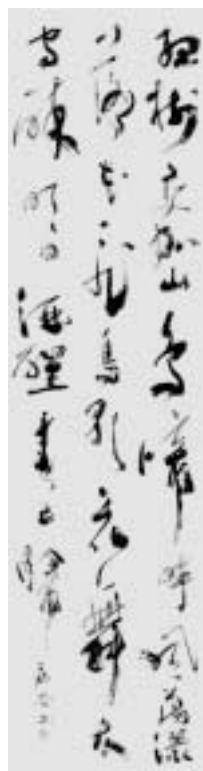
相内 珠莉 書
180×60cm

漢字

(もくせい)

森田藤谷

「豊楽亭の春遊」



◆リズムの軽妙さがかなにも通じ惹かれました。形のバランスの取り方もモダンで、自分のリズムをよくわきまえている方だと思います。(洋子評)

森田藤谷書

172×45cm

◆文字の大小、線のかすれ、造形にも巧みなよさがある。行間のゆとりあるまとめもよい。上下に少しの余白と、羊毛で線を一層深めてほしい。(祥雲評)

◆墨の濃淡を上手に場所を選んで表現し、この長い句をあきずに鑑賞させてくれる。欲いえば少しゆっくりにした筆の動きがあるとうなるか。(倫子評)

◆やや硬目の筆を駆使し、潤濁と破筆の効果を生かす。三行構成の通貫する気脈で明快さを持って冴えある作となった。雅印やや貧弱か。(大雲評)

かな

(書泉)

坂口とし子

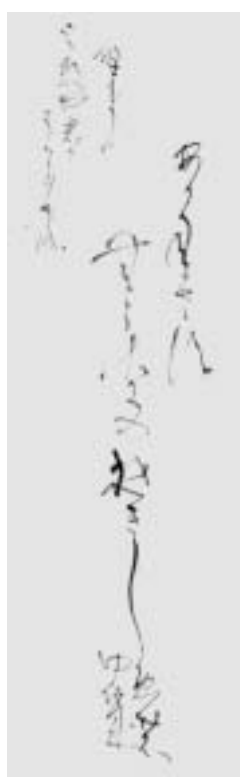
「恋の歌」

◆思い切り余白をとったまとめ、文字の大小、構成の大胆さを高く評価したい。こうした書作が出来るのは日頃の練習の成果でしょう。(祥雲評)

◆今までの作品に新風を吹きこんだ感じの構成、だがあまり考えすぎると思いが表に出すぎるのでは、でもその心を忘れずに次の作品を期待。(倫子評)

◆返し書きという散らしの形態を念頭に苦心した様子。余白の取り方、上下の文字のバランスなど問題を多々含むも思案する姿勢に期待。(洋子評)

◆思いきった構成が意表をつくが、新鮮さと明快な筆致の美しさが印象的。終末部のまとめ方にやや無理がある。更なる研究、工夫を。(大雲評)



176×53cm

坂口とし子書

前衛書

(蓮紅) 遊佐紅雅

「曙光」



180×60cm

◆大地からつき上げるような強い太陽の力を感じる。かすれもうるさくなく適当に収まり一層の生気を与えてくれる。惜しむらくは雅印が固い。(倫子評)

◆ダイナミックな動きの中に、多彩な細線が見せる繊細さに注目しました。絞った墨量もその細やかな表情に適い、知的で深淵な世界を生む。(洋子評)

◆紙面をたたきつけるかの如き運筆のリズムが紙面に緊張感を生む。濃墨による強い筆致ときしむような線質が響き合っている。(大雲評)

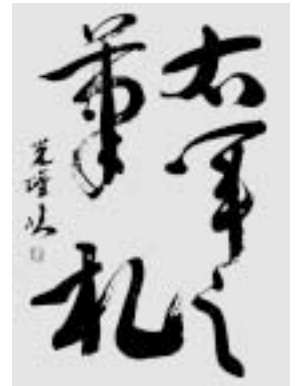
◆大胆なタッチで線が生き生きとして明るい。特に作品の上部がよい。ただ下部については穂先を整理して、今少し明るさを出してほしい。(祥雲評)

遊佐紅雅書

漢字研究部
(書譜)

選評 小 伏 小 扇

今月のホープ作品



土 屋 光 輝

◎漢字研究部総評

「書譜」の文中に、書作によい時は、
第一 気持ちのびやかで、心楽しい時

漢字研究部 特選 土屋 光輝
力のこもった運筆には、抑揚の変化があり
肥瘦大小の展開も見事、輝きのある作品です。
線質の素晴らしさに加え、章法も充分に心得
た、ゆとりの姿勢に魅せられました。

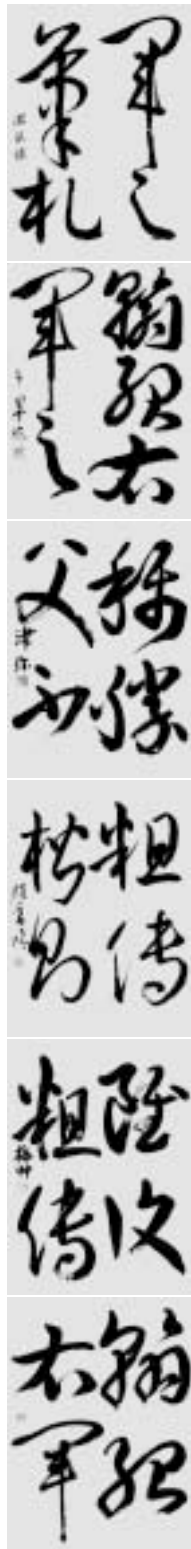
- 第二 頭が冴えて理智の働きの明瞭な時
 - 第三 気候がおだやかで湿度が適当な時
 - 第四 紙と墨がよく調和する時
 - 第五 感興が湧いて自分から書きたいと思う時
- 臨書作品を拝見して、速度も大事ですが、しっかりと止める転折の筆使いを学んでほしいと感じました。



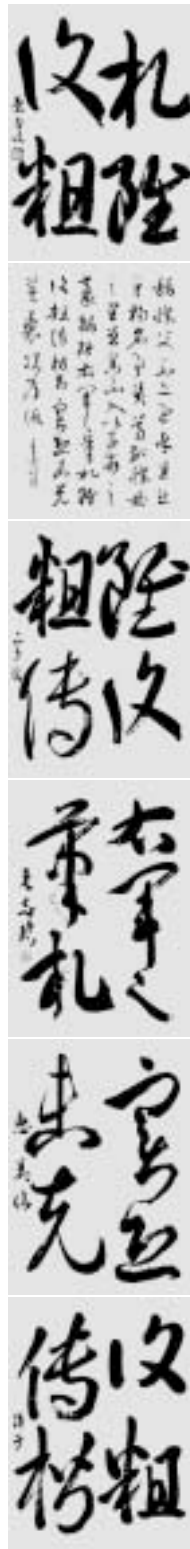
桃久花綾華
美子江雪炎



美知子
伴宏山
皓蓉苑
桂どり



游千つ桂梅
翠子香艸
白扇



蒼香正克恵
香子蘭志美
洋子

書展

玉松会十三人書展

崎井 恵風

会期 平成21年7月13日(月)～19日(日)
会場 ロイヤルサロン

早々と梅雨明け宣言された銀座。蒸し暑さの残る夕暮れ時に会場を訪れました。入口傍に出品者一同の寄せ書き作品が展示されています。各人の個性を放ちながらも、まとまりよく結束の強さを感じる作品に、しばし引き込まれていました。会長石井明子先生は今回、上田三四二の世界を発表。三点の作品は趣きを異にし、特に朱色の鮮や



出品者一同の寄せ書き

春洋会は近年、現代文を書く試行を続けています。漢字・かな混り文のひらかなの表現の難しさを痛感している昨今、かな作品の見方も少し変わりました。会場の和やかな雰囲気と行き届いたおもてなしの心をいただき、清々しい気持ちで会場を辞しました。



会場風景

燦華展

―念(おもい) PART II―

最首 翠風

会期 平成21年7月21日(火)～26日(日)
会場 東京銀座 鳩居堂画廊四階

昨年、一回目の同展の案内状を手にした時目を見張る思いでした。書展といえば公募展を別として殆どが同一会派のメンバーによるもの。会派の境を無くしての三人展は新鮮だったのです。

出品者の下谷洋子先生、千葉蒼玄先生は書道芸術院。松吉久美子先生は回瀾書道会の所属です。それぞれ仮名、前衛と所属ジャンルが異なりますが、その区別を取り払ったコラボレーションも珍しいこと、そして屏風の出陳という共通項で括っています。

まず下谷先生作では、変体がなを問わず詩文書に近い表現の俳句作品二点



会場風景



「宮澤賢治の詩」 千葉蒼玄書

が目を書きました。「あめふらし…」の簡潔さは現代を感じさせ大いに堪能いたしました。そして千葉先生作。圧巻は「光陰・奥の細道幻想」と題する屏風。芭蕉の足跡に従って行程を暗示するように弓なりに全句を小色紙に配し俳味ある表現で散らす。地の文は淡墨による工夫を凝らした構成の労作です。この発想と、書を心から楽しむ作家姿勢に参観者は長く足を留めていました。

近年長逝された水野精一門の松吉先生の屏風は四季の花を詠んだ近代短歌。半切という形式に四種の表現が見事です。小品ながら漢字作品もさすがと拝見したことです。

「念(おもい)」というサブ・タイトルを深く納得しながら会場を辞去いたしました。